

学級におけるよりよい人間関係を育てる工夫

— カウンセリング・マインドを通して —

目 次

I	テーマ設定理由	23
II	カウンセリング・マインドと学校教育相談	24
1.	カウンセリング・マインドと学校教育相談の関係	24
(1)	教育相談とは	24
(2)	カウンセリング・マインドとは	24
(3)	カウンセリング・マインドからとらえた児童観	25
2.	よりよい児童理解のために	25
(1)	よりよい児童理解を果たすための構造図	26
(2)	教師が陥りやすい固定的な観方	27
(3)	肯定的な自己概念を育てる必要性	27
3.	学級における人間関係	29
(1)	学級と人間関係	29
(2)	子どもの心をひらく担任のあり方	30
(3)	信頼関係を育てる学級経営案	31
III	カウンセリング・マインドを生かした具体例	33
1.	カウンセリング・マインドを生かした接し方	33
2.	授業と人間関係	35
(1)	授業における教師と子ども	35
(2)	授業を支える条件	36
(3)	教育相談を生かした授業	36
(4)	やる気の出ることばかけ	38
3.	授業以外での子どもとのふれ合い	38
4.	信頼関係を保つ叱り方、励まし方	40
IV	親との連携	41
V	反省と課題	43
	<主な参考文献>	

浦添市立内間小学校

伊 保 君 子

学級におけるよりよい人間関係を育てる工夫

— カウンセリング・マインドを通して —

浦添市立内間小学校 伊保君子

I テーマ設定理由

私たち教師は、一人ひとりの子どもが学校生活にうまくとけこみ、学級の諸活動を通して自分の持っている力を十分に発揮しながら、成長・発達することを願っている。

子どもは、家庭から学校、地域社会へと次第に行動範囲を広げる過程で、ものの見方や考え方や行動にさまざまな影響を受けるようになる。特に教師や友達を中心とした人間関係は、子どもの人間形成において大きな影響力を持っていると思われる。教師や友達を中心とした人間関係の場を学級と考えた場合、学級は、学校における子ども達の学習の場であると同時に、重要な生活の場でもある。この教育活動の基盤である学級で、一人ひとりの子どもがそれぞれ備えているもの（能力・特性・個性）を十分発揮できる学級づくりができればどんなにいいだろうか。“人間は対人関係によって変わる”と言われてるように、教師と子ども、子ども相互のよりよい人間関係づくりが学級において重要な課題となる。このように、学級における人間関係はすべての教育活動の基盤である。教師と子どもの関係がうまくいかなかったり、友人関係に問題があるときは、早めに改善しないと、いじめや登校拒否等の問題が生じるおそれがある。

子ども達が、「いつも明るくいきいきと、やる気に満ちている学級」これは、私のめざす学級の理想像である。毎年4月になると、“よし、やるぞ”と、はりきって学級経営に取り組む。けれども、1学期、2学期と学期が進むにつれて、

- ① 子ども達が落ちつかずおしゃべりが増える。
- ② 気に入らないことがあるとすぐ、大声をあげてしまう子。
- ③ 授業中、他の子を指名すると、「ぼくだってやりたいのにどうして、ぼくにはさせてくれないのか」と、文句を言う子。
- ④ ケンカっ早くて自分をおさえることのできない子。

等が増え、その対処に苦労することの多い日々を送ってしまいがちである。

なぜ、子ども達がこのような態度や行動を示すようになるのだろうか。そこで、これまでの私の指導を振り返り、その原因を考えてみたら学級を運営するにあたって、担任として子どもに対する見方・考え方・接し方等に工夫が足りなかったのではないかということに気がついた。

そこで、教師がカウンセリング・マインド（教育相談的態度・姿勢）を学ぶことによって、子ども一人ひとりをよく理解し、教師と子ども、及び子ども相互のよりよい人間関係を築けば、子どもは精神的に安定する。「先生にほめられた」「認められた」と感じることで、教師に対する親しみが強まる。それとともに、教師と子ども、子ども相互の人間関係が改善され、学級の雰囲気も次第に好ましい方向に進むものと思う。その結果、子ども達は楽しい学校生活を送ることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II カウンセリング・マインドと学校教育相談

1. カウンセリング・マインドと学校教育相談の関係

(1) 教育相談とは

「教育相談」についての考え方や進め方は、初期（昭和30年代）の頃からこれまでの間に、いろいろ変わってきたが、北島氏は現在の学校教育相談の特徴を次のように述べている。

① 全ての教師が教育相談の担当者である。

学級担任の教師だけでなく、専科の教師、養護教諭、管理職の教師等、学校における全ての教師が、教育相談の担当者である。学校をあげて全力で、子ども達の問題にあたらなければならないようになったことから、これは当然のことと考えられる。

② 対象とする問題は、目の前にいる全ての子どものもつ問題である。

目の前に40人の子どもがいれば、これら全ての子どもは、多かれ少なかれ、成長発達の過程の中で、適応上の悩みや問題を持っているものである。たとえ、悩みや問題をもっていないと思われる子どもでも、じっくり接してみると思わぬことで悩んでいたりすることがある。特に小学生の場合、自分の悩みや問題を意識できないことが多いので、教師としては何とか早くこれらの問題を発見してやる必要がある。児童の悩みや問題を早期に発見し、児童自身が自分の問題を解決できるよう、側面から支え援助してやる機能を学校における教育相談ととらえたい。

③ いつでも、どこでも、だれでもできる教育相談である。

専門機関で行うように特殊な技術や難しい理論を駆使して行うものではなく、だれでもが気軽に、児童の問題とかかわっていける気安さというものが大切である。つまり、学校における教育相談は、すべての子どもを対象に、すべての教師の手によって、いつでも、どこでもという形で進められることが望ましい。

以上のことから、学校における教育活動の場が、そのまま教育相談の場であると考えられる。要するに、普段のなにげない教師の言動、たとえば、ほほえみかける、言葉をかける、話し合う、いっしょに遊ぶ、日記による対話などで、子どもとの心の交流の機会を積極的に作り出していく努力が教師にとって必要である。つきつめて考えると、学級担任にとっては、「目の前にいる一人ひとりの子どもを生かす学級経営」ということになる。

(2) カウンセリング・マインドとは

カウンセリング・マインドについては、いろいろな説明の仕方があるが、十束文男氏によると、「一人ひとりの子どもを尊重し、子どもとの人間関係を基盤にして、子どもの可能性を引き出し、子どもの全人的な発達を図るための援助を行う教師の姿勢」と述べている。つまり、子どもが心を開くように援助してあげるための教師として身につけなければならない考え方や態度ととらえたい。

また、教師に必要なカウンセリング・マインドについて、辰野千寿氏は学習指導用語辞典の中で、下記のような4点を述べている。

① 教師が子ども一人ひとりの気持ち、感情、考え方を尊重する態度、姿勢である。

② 子ども一人ひとりの感情を、そのままありのままに、共感的に理解しようとする態度、

勢勢である。

③ 自己一致、または、純粹性。つまり裏表のない態度、ごまかしのない誠実さ。

④ 中立性、これは第一条件の「尊重」と関連している態度である。

以上のことから学校における教育相談活動は、カウンセリング・マインドの精神で実施することが重要であると考ええる。

(3) カウンセリング・マインドからとらえた児童観

上記の(1)、(2)でカウンセリング・マインドと教育相談の関係について述べたが、カウンセリング・マインドでは、一人ひとりの子ども達をどのようにとらえるのか、その根底になる児童観については次のとおりである。

すべての子どもは他にかけがえのない絶対的な存在である。

学級の子ども達は、一人ひとり顔や姿が異なるように、ものの見方・感じ方についても十人十色に違う。それは、次のような違いからくるものだと思われる。

- 生まれたときにすでにもっている個人的条件の違い：知能やエネルギーの強弱等
- 家庭的条件の違い：親子関係における愛情の大きさや表し方等
- 経験的条件の違い：同年令の友達との接触の多少、遊びの経験の多少等
- 教育的条件の違い：しつけるべきことがしつけられ、年齢に応じた耐性の有無等
- 社会的条件の違い：地域社会のムード、環境等

などに基づくものであって、これらの違いは優劣をつけることはできない。このようなさまざまな特性や背景をもった子ども達が、その子なりに可能性を発揮し、個性ある人間としての成長をめざす観点から、一人ひとりについて心を配っていかなくてはならないと思う。どの子ども — もっとよくなりたい — という成長への動機をもった主体的な存在である。

子どもは条件さえ満たされれば、自らの力で立ち直ったり、よりよく生きようとする可能性を秘めた存在である。

以上のように子どもをとらえ直したならば、教師として、子どもへのかかわり方が当然変わるべきだと思う。子ども一人ひとりが生きようとする力が働きやすいように援助するのが、我々教師の務めと受け止める。では、教師としてやるべき仕事とは、一体、何だろうか。それは、個々の子どもの内面理解に努めることが教師に今、強く求められている仕事だと思われる。

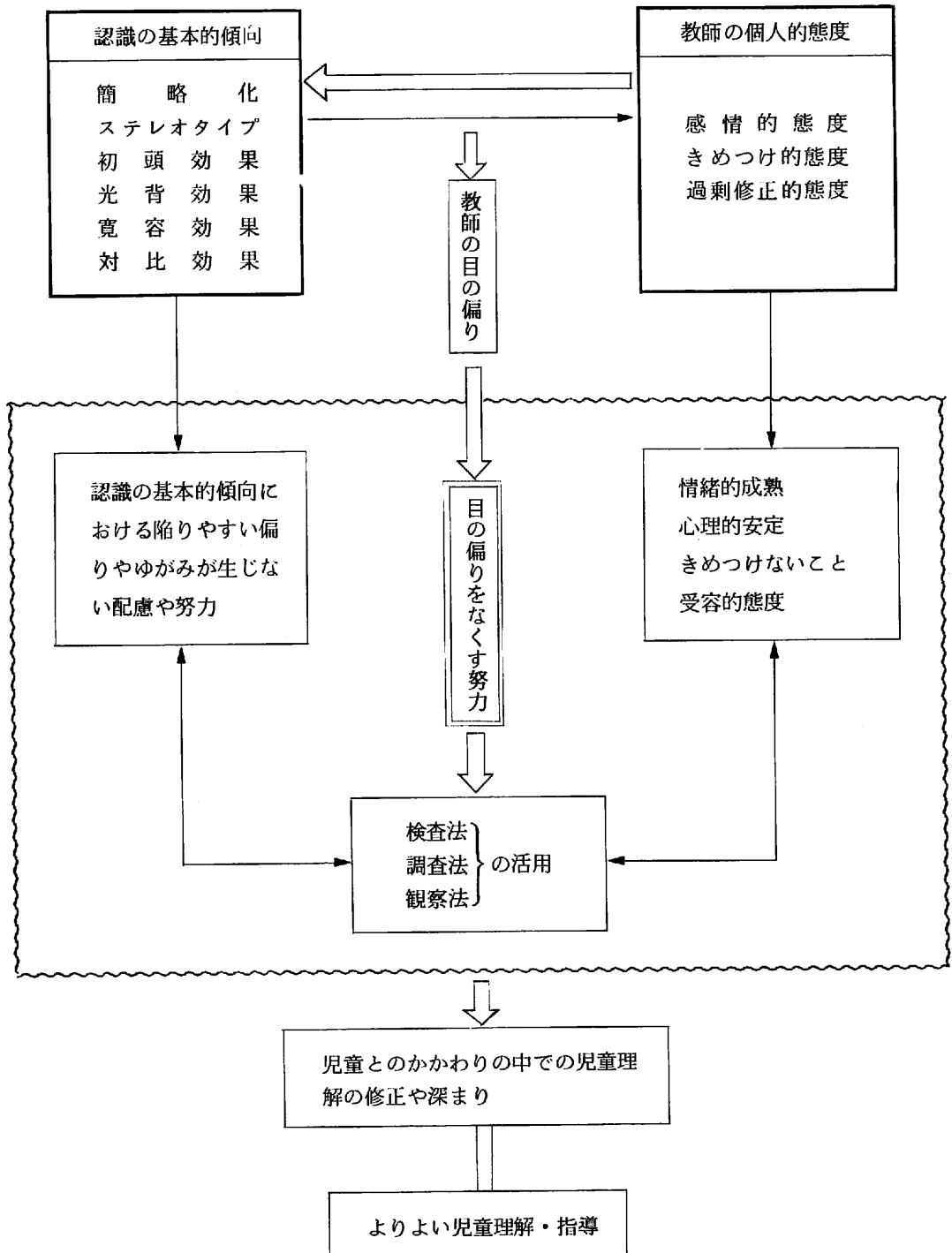
2. よりよい児童理解のために

学級担任は、毎日子どもに接しているのだから、子ども一人ひとりの行動を観察し、よく理解し、よい方向にもっていけるはずである。しかし、現実には、なかなか難しくてうまくいかないことが多い。それは、教師が子どものもつ問題や精神的なものに距離が保ちにくいということと、子どもの内面が見えにくいだけに、対処が的を得てない面があるのではないと思われる。そこで、担任が、子ども一人ひとりをよく理解し、よりよい人間関係を築いていくためにはどうすればよいのか、これまでの判断や見方を問い直してみたい。

まず、『小学校実践講座Ⅰ 児童の理解・指導』(P 79) 中にある「よりよい児童理解を果たすためには」の構造図を示し、教師が陥りやすい固定的な見方について述べてみたい。

(1) よりよい児童理解を果たすための構造図

よりよい児童理解を果たすには



(2) 教師が陥りやすい固定的な見方

我々教師が、子どもを見るときに、教師として陥りやすい固定的な見方があることを尾崎氏は次のように挙げて、その見方を述べている。

<光背効果>

ハロー効果ともいう。ある点が輝いていると、それと無関係なことがらについても、よく見えてしまうことである。たとえば、国語、社会、算数、理科などがよくできると、性格もよいと思いきなり、全教科調和してよくできると友達関係もよいと思いきなりすることである。

<初頭効果>

第一印象や先入観を基にして子どもを理解してしまう落とし穴で、このような見方をしていると、その子の現在のありのままの姿が理解できにくくなる。

<寛容効果>

教師の好みに合う子どもの言動には寛大で、その逆の子どもの言動には寛大になれないという見方である。これは、子どもから見ると不公平さがはっきり現れるので、教師として最も好ましくない態度である。

<対比効果>

教師が自分の持っている傾向や特性を基準にして、他人を落ちつきがないとか、動作が遅いなどというように判断してしまうゆがみである。かつて優秀な子どもであった教師の陥りやすい傾向であり、子どものありのままの姿を見失いがちになる。

つまり、勉強ができるというだけで、すべての行動を善意に解釈し、好ましくない行動も、「子どもだからしょうがない」というようにとらえたり、また、勉強ができるのだから自主性もすぐれているはずだ、根気強いはずだ、正義感も強いはずだ、というように理論的によく評定してしまうという誤りをおかしがちである。

(3) 肯定的な自己概念を育てる必要性

自己概念とは、自分が自分をどう見ているかということである。肯定的な自己概念をもっている子どもは、自分にはかけがえのないユニークな存在としてこの世に生きている価値があると感じている。反対に、否定的な自己概念をもっている子どもは、自分なんかいなくても同じだと感じていると言われている。

肯定的な自己概念は、学習面でも意欲的に取り組み、がんばっていく土台となるので、教師、は子どもが肯定的な自己概念をもつよう援助していくべきだと思う。

教師は、自分の人生観、教育観、好みに従って子どもを理解しようとする傾向があると言われる。たとえば、動きの多い子をA先生は、「落ちつきのない子」と否定的にとらえ、B先生は、「活動的な子」として肯定的にとらえることがあるということである。

一人ひとりを生かす児童理解をすすめるには、教師が子どもを肯定的に理解してあげ、個性を伸ばすことを念頭において進める必要があると思う。同時に、肯定的理解が行えるように教師が自己変革をすることが大切である。

教師の子どもを見る目を変えることによって、子どもが肯定的な自己概念をもつようになる。

下の表は、教師が子どもの見方を補正する時の参考資料である。

<参考>問題行動や短所を個性や長所としてとらえるための視点

(注：南小倉病院長 院長 矢内伸夫氏の講演資料より)

短	所	長	所
1	消極的 陰気 はきはきしない	1	調子にのらず平静 落ち着いてこつこつやる
2	取りこし苦勞 気が弱い こわがり おくびょう くよくよする	2	慎重 用心深い きちんとしている
3	気をまわす ひがみっばい 人の顔色を気にする	3	直感的に他人の気持ちをくみ取る よく気がつく
4	おどおど はにかむ 引込思案 発表力に乏しい	4	きちんとしている まじめ こつこつやる
5	ぐず 手間かかかる ためらいがち	5	念入り 綿密 着実
6	協調しない 無愛想 とっつきが悪い	6	冷静で批判的 動じない おっとりしている
7	しつこい くどい 触通性がない	7	粘り強い 綿密 熱心 固い
8	あきっぱい つられ易い 気が散り易い	8	従順 素直 環境によく順応
9	軽はずみ 早のみ込み せっかち そそっかしい	9	気軽に行動 積極的 機敏 決断が速い
10	落ち着かない いたずら やりっぱなし	10	活動的 こまめに動く 元気がいい
11	気まぐれ 気分屋 不平が多い	11	気が向けば一気にやる こだわらない
12	独りよがり 我を張る 負け惜しみ 出しゃばり	12	はきはき くじけない ものおじしない
13	気が荒い かんしゃく 興奮しやすい	13	元気がいい 熱情的 正義感が強い
14	上っ調子 ふざける 騒がしい その場限り	14	明朗 快活 無邪気

『学校教育相談の理論』

3. 学級における人間関係

(1) 学級と人間関係

どの子どもも条件さえ満たされれば、自らの力で立ち直ったり、よりよく生きようとしたりするようになるというのが、教育相談の基本となる考え方であると言われている。そうであるならば、学級担任は教育活動の基盤である学級において、1人ひとりの子どもがそれぞれ備えている能力・特性・個性を十分発揮できるように学級集団を育てることが、学級経営の重要な柱となると思われる。

子どもはふだん、自分の中ではっきり意識していないかもしれないが、“先生や親にほめてもらいたい。勉強や運動がもっとできるようになりたい。友だちにも認めてもらいたい”等の欲求を持っている。少しでもこのような欲求がかなえられると嬉しくなる。この嬉しさは、他の人に理解されることによって2倍または3倍になり、これが次への努力の源になると言われている。だから、子どもには心の通じ合う先生や友だちが必要になる。

子どもにとって、学級は学習の場であり、生活の場である。この学級のなかでは、さまざまな個人や集団がともに学び、遊び、そして親しみ、争い、嫉妬し、協力したりしている。つまり人間が生きていくのに必要な生き方の追求や知識・理解・技能の習得を学級のなかで学んでいるわけである。その生き方や知識・技能は個人のものでありながら、集団のなかで集団を通して習得されていくものだと思う。

では、子どもの伸びようとする力や個性が発揮できるような学級にするために、教師は一体どんなことに気をつけなければいけないだろうか。尾崎・西氏は『カウンセリング・マインド——子どもの可能性をひき出す教師の基本姿勢』の中で、「信頼関係を阻害する教師の姿」として、次のことを挙げている。

- ① 子どもの立場や気持ちを察するよりも、教師が自分の考えや立場を一方的に押しついたり、きめつけたりしていないかどうか。
- ② 外から規制することばかり考えて、子どもが自ら洞察し、変容するような援助する工夫を怠っていないかどうか。
- ③ 教えることや覚えさせることに性急になり、子ども自身が考え、解決する力を育てることに手ぬかりはないかどうか。
- ④ 子どもの言い分を聞こうとせずに、すぐに説教や叱責をすることはないかどうか。
- ⑤ 子どものペースを考えずに追い立てたり、たたみこんだりして、待とうとする姿勢が欠けていないだろうか。
- ⑥ 子どもがかかえている問題について、子どもの主体性を尊重しながら、ともに考え、ともに解決しようとする連帯意識に欠けていないかどうか。

もし、教師にこのような姿勢があったら、それは子どもの健全な成長や子どもとの信頼関係を阻害するものになると思われる。つまり、教師の子どもに与える影響は大へん大きいものだと言える。

では、教師の子どもを見る目や子どもとのかかわり方をどう考えていったら、子どもと教師の信頼関係を築くことができるであろうか。そして、子ども達が持っている可能性を実現して

いくよう援助することができるのであろうか。

(2) 子どもの心をひらく担任のあり方

① 教科を教えることを大切にしながら、それ以上に子どもを育てることに関心を持つ担任
いつも子どもの立場になって考え、目、耳、心でもって子どもをキャッチできる子どもの好きな担任。

② 子どもの心——感情——を大切にする担任
人間はもともと自分の行動を自分で決めながら進んで行動するもので、他人や外部からの圧力で行動するものではない。子どものやる気も、教師から「もっとやる気を出しなさい」と言われて育つものではない。だから、興味・意欲・情操とかの感情を大切に子どもと接していける担任。

③ 子どもの行動は、関係によって変わることを知っている担任。
子どもが素直になるか、反抗的になるかは、子ども自身の性格によるよりも、子どもに接する人の態度や感情によることが多い。つまり、教師自身が、ある子どもを否定的に見ているか、肯定的にみているかによって、その子の教師に対する態度は違ってくる。「あの子が悪い」と、子どもを攻める前に、自分の子どもを見る目を変えようとする担任。

④ いつも行動の背後にある条件やプロセスを理解しようとする担任
問題行動をくり返す子へかかわる時は、「止めなさい」と怒鳴る前に、なぜ、そのような行動をくり返すのかについて考えてあげる。その子の家庭や親子関係、生育歴など、問題を生み出す背後の条件やプロセスを知る必要がある。そうすることによって、その子への見方や考え方を変える担任。

⑤ 子どもに教えられる担任
子どもの感覚、考える力、好奇心など、子どもの活動に常に新鮮な動きを感じ、子どもの力を大切にしようとする教師は、子どもの伸びる力を育てる教師である。また、いつも先に立って号令し、教え、詰め込み、引っぱっていかうとする教師ではなく、子どもの力を信じて、自己決定の力を伸ばせるような担任。

⑥ 一人ひとりの独自性を大切にする担任
子どもはそれぞれ、百人百様の個性を持ち、それぞれが違った考え方をする。教師の枠組みから外れていたとしても、それは1人の独自の存在として認めてあげるべきだと思う。このような考えをもてば、授業の中における子どもの発言も頭から否定せず、独自の発想や考えだとしてとらえてあげられる。担任の受け取り方によって、自分の気持ちをわかってもらえた子どもは、いよいよ積極的になるものと思われる。

⑦ クラスのメンバーの相互作用を大切にする担任
教育相談は、いつも個別にかかわるということではない。私たちの生活の大部分は、人と人との関係において営まれる。その中で、私たちはお互いに影響を与えたり受けたりしながら自分で考えて生活している。集団に加わり、集団活動に参加することによって、精神的な安定を得ることができ、いろいろな活動に意欲的に取り組めるのである。

⑧ 自分の限界を率直に認められる担任

担任と言えども万能ではない。いくら努力してもうまくいかない問題もある。子どもに対して、自分の限界を感じた時には、一人で悩まず他の先生方にも協力してもらい、子どもをみんなの力でよくしていこうとする柔軟さを持つべきである。

⑨ 以上の上になって、教師として教えるべき点、守らせるべき点をはっきり示せる担任

子どもの心が見える教師というのは、教師の一方的な枠組みで子どもの心をおしはかるようなかかわり方をするものではないと思われる。子どもの立場に立って、望ましくない行為は、その理由をはっきり示し改善させる。また、好ましい行為は、好ましいことを具体的に分からせ、認め励ますことによって、さらに強化していく。このように柔軟な感性、根気強いエネルギーを持ち合わせた担任でありたい。

以上、述べたように、子どもを伸ばすのもゆがめるのも、周囲の人との人間関係のあり方に左右されるところが大きいことが理解できた。子どもとの人間関係を高め、その可能性をひき出すような考え方や接し方で臨むために「信頼関係を育てる学級経営案（試案）」を作成した。この経営案をもとにして、カウンセリング・マインドを生かした学級づくりを目指していきたい。

(3) 信頼関係を育てる学級経営案

学 校 目 標	よく考え進んで学ぶ子、すなおで心ゆたかな子、強い体と気力を持つ子		
学 年 目 標	しっかり聞いてよく考える子、生きものにしたしむ子、最後まで元気ががんばる子		
学 級 目 標	目と耳で話をしっかりきく子、一日に一度はお友だちによいことのできる子		
学 級 の 実 態	全般的特徴	男 18人 女 14人 } 32人	<ul style="list-style-type: none"> ●基礎学力が身につけていない子がいる。 ●特別にいじわるする子もいなくて、おだやかな雰囲気である。 ●そうじのやり方が上手でよく働く(このまま伸ばしていきたい)
	教育上配慮 を要する子	A男	ひきつけの持病がある。学力不振児
		B男、C子	母子家庭
		D男	忘れ物が大変多く、基礎学習が弱い。
		E子	双児
経 営 方 針	<ul style="list-style-type: none"> ●教師と子ども、子ども相互の好ましい人間関係の育成をめざす。そのためには正しい児童理解の上になって、子どもとのふれ合いの場を多く持つようにする。そうすることによって個性も発見できる。その個性や能力が十分発揮できるような集団作りを心がける。 ●学級目標を口癖、合い言葉にする。(一日三回以上は学級目標をつかって子ども達をはめる) 		

指 導 の 重 点	教 科	<ul style="list-style-type: none"> ●読み、書き、算をしっかりと学習させることによって基礎力をつけたい。そのために考え方、話し方、聞き方等の基本的な学習態度をきちんと身につけさせたい。 ●一人ひとりに目を向け、子どものつぶやきを拾い、うなずき、励ましていく。 ●机間指導を密に行い、一人ひとりが授業に生きるよう細やかな配慮をする。 ●ノートへの赤ペン入れを心がける。 ●感じたこと、分かったことは、はっきり話すようにさせる。 ●友だちの発言に対して笑ったり、ひやかしたりすることがないようにする。
	道 徳	<ul style="list-style-type: none"> ●礼儀の面に欠けるので、礼儀正しい言動をさせることにつとめることにより、信頼関係を高める。 ●規則の尊重、ねばり強さに欠けるので、規則が守れるような指導、助言の工夫をする。又、ねばり強く最後まで取りくむような心情を育てる。そのことが向上心につながる。
	特 活	<ul style="list-style-type: none"> ●一人ひとりに役割分担をし、活動が全員の子どもの目に見えるよう工夫し、指導助言を大切に。「Aさんがこんな仕事をしたよ」と具体的事実をとりあげて励ましてあげる。 ●「文化・スポーツ・レクリエーション」活動を取り入れることによって、多くの子が活躍できる場を提供する。 ●当番活動と係活動をしだいに区別・分離するよう指導する。
	生 徒 指 導	<ul style="list-style-type: none"> ●まず、自分を大切にすることを基点にする。そのためには、肯定的な自己概念が育つような援助・励ましをし、自分に対する自信を持たせる。 ●よりよい児童理解のために個人カルテやメモ日記等を活用し、望ましい方向に伸ばしていく。 ●帰りの会で、「お友だちのよいところ見つけ」を発表させ、やる気や自信を持たせるようにする。
教室 経 営	<ul style="list-style-type: none"> ●安全面に心がける。教室が整理整頓され、落ち着いた雰囲気での学習できるようにする。 ●清掃が行き届いた気持ちのよい教室づくりをする。 ●それぞれの子どもの作業が目にとまるように作品の提示、展示をする。 	
学 級 事 務	<ul style="list-style-type: none"> ●能率的・効果的に処理される必要があると同時に、子ども理解の重要な機会である。指導事務（指導要録、健康診断票、歯芽検査票、家庭調査表）は、教師の偏った子ども理解を修正する機会として活用する。一人ひとりの子どもの顔を思い浮かべながら進めていく。 	
親 と の 連 携	<ul style="list-style-type: none"> ●性急なかかわりを慎む——子どもの問題を共に考えるという立場でかかわりを持つ。特に問題を持った子どもの親に対しては、まず、欠点の矯正よりも長所を伸ばすことを考えようという態度で接する。 ●文書での連絡では、言葉を選ぶようにする。 ●恵まれない家庭の子には、温かな心配りをする。 ●父母会や授業参観も積極的に活用する。（個人面談、集団面談） 	

Ⅲ カウンセリング・マインドを生かした具体例

1. カウンセリング・マインドを生かした接し方

教師は「話し上手」だが、「聴くのは下手」とよく言われている。それは、子どもとの話し合いの中で、自分の持っている価値観に反する言動を相手が示すと、どうしてもそれをとがめたくなるので、とかく教師の側からの伝達や説得、注意、叱責にとどまってしまい、子どもが教師に訴えたいこと、聴いて欲しい気持ちを見のがしがちになる。そうならないために、とにかく「聴く」ことに徹したい。では、「聴く」ということはどういうことだろうか。それは、単なる言葉のテクニックだけではなく、教師の態度や心構えが大切になると思う。

そこで、「聴く」ことの具体的な方法を述べてみたい。

(1) 子どもの言うことを批判したり評価したりしない。

教師はとかく、子どもの言うことを、「それはよい」「それは間違っている」「そういう考え方はいけない」などと批判しがちである。批判され、評価されていると感じると、子どもは、ありのままに自分を出せなくなる。受け入れるということは、評価や批判なしにありのままに認めるということである。

(2) 子どもの話の腰を折って教師の価値観や考えを伝えない。

教師の価値観や考えを伝えることは、とても大切で必要なことである。しかし、子どもが話しているときに、教師の価値観や考えを伝えることは、子どもの話の腰を折ることになり、子どもは、それ以上話せなくなってしまう。教師は何か言ってあげたくなくても、それはちょっとわきへ置き、まず、子どもの気持ちに耳を傾けることが大切である。教師の価値観や考え方はあとから伝えればよいと思う。

(3) 教師は、からだ全体で受容と共感を伝える。

「私はあなたを大切に思っています」、「あなたの話をしっかり聴いています」ということをからだ中であらわすことも大切である。

たとえば、にっこり笑う、びっくりするなどの表情、温かい受容的な表情、子どもの方を向く、上から見下さない、子どもと同じ目の高さになる、うなずく、あいづちをうつ等して、受容と共感を相手に伝えてあげたい。言葉の場合は、語調やニュアンスも大切にしたい。

(4) 子どもの言葉だけでなく、言葉以外の表現にも注意する。

子どもの表情、声の調子、手をぎゅっと握りしめている。動かしている、うつむいている、顔をあげている、のろのろしている、目をそらしているとか、からだ全体で表現しているものを感じる大切である。これらのことは、言葉だけ聞いていては聴きのがしてしまうかもしれない。

(5) 子どもの気持ちをこう受け取ったけれど、これでいいのかどうか、確かめる。

気持ちというものは、一人ひとり違う。外から見ているとはわからないことも多い。わかったと思えることも、推測にしかすぎないのだということを教師は知っておく必要があると思う。それで、「あなたは、今こういう気持ちなのね」と確かめてみることは、教師に子どもの気持ちを確認できると共に、子ども自身が、自分で自分の気持ちにはっきり気づく援助になる。

(6) 子どもの言っていることを整理しまとめ伝え、それでいいかどうか確かめる。

子どもが長く話したり、こみいった話をしているときには、「要するにこういうことなのね」と整理して、まとめて伝えることである。そうすることによって、教師にも子どもにも、漠然としていたものがはっきりしてくる。それによって、子どもが言っていることの全体の意味が見えてくる。

次に、面接の実際場面を提示し、子どもが語り、教師が聴く面接への転換を図っていきたい。

これまでの接し方	これからの接し方（積極的な聴き方）	
<ul style="list-style-type: none"> • なぜ、そんなことをしたのか。 • ……が悪いことぐらい知っているだろう。 • ……べきだよ。 • それは間違っているよ。 • そういう考え方はいけないよ。 	<ul style="list-style-type: none"> • うん、うん • なるほど、なるほど • なるほど、そうだったのか。 • そういう気持ちがあったのか。 	受容 の 態 度
<ul style="list-style-type: none"> • これくらい我慢しなさいよ。 • そんなことないんじゃない。 	<ul style="list-style-type: none"> • 今までよく我慢したね。 • それは大変だったなあ。 • それはそうだね。 	支 持 す る 態 度
<p>お母さんが、勉強は何時間やったかってうるさく聞くから、もうどこかへ逃げ出したいくらいなんです。</p>		繰 り 返 し
<ul style="list-style-type: none"> • どうして逃げ出そうなんて考えてしまうのよ。 	<ul style="list-style-type: none"> • そう、もう、どこかへ逃げ出したいくらいなんだね。 	
<p>勉強しなくてはいけないとわかっているんですが、勉強も何も手につかなくて、どうしていいか自分でもわからないんです。</p>		明
<ul style="list-style-type: none"> • もう1度よく考えてごらん。 • 考えたらわかるようになると思うよ。 • 「勉強しなくてはいけない」とわかっているんだったら、できるんじゃないの。 	<ul style="list-style-type: none"> • そお、こんな状態のまんまでいったら、この先、どうなるかって心配なんだね。 	確 化

<面接における沈黙のもつ意味と教師の対応のし方>

面接をしていると必ずといっていい程、子どもの沈黙にぶつかるものである。その場合、教師はつついあせって、「なぜ黙っているんだ、何とか言いなさいよ」と、怒鳴ってしまいがちである。面接における沈黙にもそれなりの意味があることを念頭に入れ、子どもに接していきたい。

このことは、授業においての発言における間や沈黙にも同じことが言えると思う。間や沈黙に出合ったときは、まず、相手の気持ちになって、どのような意味をもつ間、沈黙であるかを察することが大切になると思う。

子どもが示す間、沈黙	教師の対応のし方
㉗ 一区切り話して、次はどのように話を構成していったらよいか考えている。	○子どもが考えていきやすいように、ゆったりと「待つ」ことが必要である。
㉘ 一区切りついてホッとしている。	○教師も一緒にホッと息抜きをする。
㉙ 話したことや発表した考えについて、これでよいのかと気にしている。	○「少し気になる点があるんですね」と気持ちを受け入れることによって、安心感を与える。安心感をもてば、再び思考を続けていくことになる。
㉚ 相手にわかってもらえただろうか。このまま続けてよいのだろうか迷っている。	○「分かりますよ」とか、もし分からなければ、謙虚にそれを尋ねていくなどの対応が必要である。

以上のように、子どもが心をひらき、ゆったりした気持ちで十分自分を語れる雰囲気にするためには、教師の安定した心と柔軟で素直、さらに子どもを受け入れる広い心が求められるのではなかろうか。教師が子どもの考えや言い分に耳を傾け、見守ることにより、子どもを新しく発見できる喜びも得ると思うので、このようなことのできる受け皿の大きい教師をめざす必要がある。

2. 授業と人間関係

(1) 授業における教師と子ども

一日の学校生活の中で、教師が子どもと接する時間が一番長いのは授業である。そのことは、授業が教師と子どもにとって、質的にも量的にも学校生活の重要な部分をしめしているということが言える。そうであるならば、授業での教師と子どものふれ合いは、何よりも大切にされなければならないはずであって、これをないがしろにして、別の時間でふれあいを高めるとしても効果はあがりにくいものだと思う。

学校教育は、全人教育をねらいとし、授業の中でもそれをめざすことはいうまでもない。それにもかかわらず、授業が子どもにとって、「ここにいるのがつらい」とか「いらいらしてしまう、何か心配だ」とか、「よくできる友だちへの嫉妬を感じるとともに、自己不信感に陥る」等というような心情をたどる場になるとしたら、全人教育とは全く逆の経験をさせていることになる。

このように大切な授業では、教師としての力量だけでなく、人柄までもが洗いざらい子どもの前で現われてしまう。「それゆえに、教師が己を打ち込む授業には、児童を内から揺さぶる迫力がある」と、『学校教育相談の理論・実践事例集』の中で相馬氏は述べている。

教師としては、授業で教科の内容を教えているつもりである。しかし、子どもは、教科を窓口にして、よかれ悪しかれ、一人の人間としての教師から学ぶものが多い。授業の中で発せられる教師のひと言、ひと言、または、その時のそぶりやまなざしが、児童の学習への動機づけ、

興味・関心さらには、人間形成にも影響を与えることが多いと考えられる。それは、自分が直接教師から指導される場合は勿論のこと、級友が指導を受けているのを傍で見ているときにも、その事態が自分に向けられたのと同じように感じている。こうして、毎時間の授業を通して、子どもは、教師に対する見方を深めていくと言われている。

このことは、教師と子どもとの関係を考える上で、見おとされやすいが、きわめて重要なことであると思われる。

(2) 授業を支える条件

授業の成立に作用する大きな要素として学級の人間関係がある。好ましい人間関係が育てられていないと、何でも思ったことを話したり、純粋な気持ちで話し合ったりすることができないからである。好ましい人間関係を育てるために次のような点に留意することが必要である。

集団思考を深める好ましい人間関係の育成

- 一人ひとりの考えを大切にし、何でも言える学級をつくる。
- 一人ひとりの意見をよく聞いてやり、授業の中に生かしていく。
- ボスをつくらないように、また排斥児もつくらないようにする。
- 学力面だけをみつまず、一人ひとりのよさをみつけ認めてやるようにする。
- 協力の気持ちを育てるようにする。

授業の時間は学校生活の大部分を占めているのであるから、上のような配慮は特に授業を行う中で大切にされなければならない。

(3) 教育相談を生かした授業

上記の(1)、(2)で述べたように「授業における教師と子どもの関係の重要性」をふまえ、授業においても教育相談的配慮をもって臨みたい。授業に教育相談を具体的に生かすにはどうすればよいだろうか。その具体的な生かし方について述べてみたい。

下の図は、「教育相談を生かした応答」と「考慮を要する応答」を比較したものである。「考慮を要する応答」の①は、子どもにじっくり考えさせるのではなく、教師のおしつけの面が強い。学習内容の指導よりも、子どもの学習態度の矯正ばかりに目が注がれがちになっている。これでは、子どもの学習への意欲・興味・関心は育ちにくいと思われる。一方、「教育相談を生かした応答」の過程にある②は、子ども達にじっくり考えさせ、その感じ方、考え方、行動をうまく引き出し、子どもの気持ちを考えた学習の展開をしていこうとしている姿勢がうかがわれる。このようなかかわり方が、教育相談的配慮であり、子どもの学習への意欲・興味・関心を高めていくものと思われる。

教育相談を生かした応答

t 考慮を要する従来の応答

T 教育相談的配慮を生かした応答

- c Tを待つ（ガヤガヤ……）
 ① やかましいですよ。静かに。

始業の合図

- ① Cたちを待つ。
 ① さあ、始めよう。この時間もいい勉強ができそうだ。

- ① この時間は、〇〇の勉強をしよう。

学習内容を提示して
 教材を提示して
 学習内容を提示して
 学習内容を提示して

- ① 〇〇や△△から、この時間は、どんな勉強をしたいですか。
 C □□について調べてみたい。
 ① この時間は、□□について、みんなの考えを出し合う勉強をしよう。

- c 私語（ガヤガヤ……）

禁止私語の
 禁止私語の
 禁止私語の

- C 私語（ガヤガヤ）
 ① いい勉強法を思いついたのかな。

- ① だれですか。ちゃんと聞きなさい。

緊張し課題感に
 緊張し課題感に
 緊張し課題感に

- ① みんなの力で考えるとおもしろそうだな。
 ① 何がありますか。大きな声で言って下さい。

- ① これ難しいよ。
 よく考えるんだよ。

学習方法
 の指示
 の指示
 の指示

- ① 〇〇分くらいグループで話し合いますか。
 C 話し合う前に、自分で考える時間を下さい。
 ① みなさんどうですか。じゃ、自分で考えてから話し合ってください。

- ① グループで話し合ってみなさい。

- ① キョロキョロしないでグループの人の発言を聞きなさいよ。

否定
 指示
 否定
 指示

- ① なるほど、今のCさんの□□という考えは、〇〇ということ△△に含まれるということですか。
 C そうです。
 ① うーん。そういう考え方もあったんだな。先生気づかなかった。

- ① それは少し違う。もう少し考えてごらん。

肯定
 反射
 肯定
 反射

- ① うん、うん、よく分かってきたよ。なるほど、よく考えているな。
 C えーと、あっ、忘れてしまった……。
 ① 立ったとたんに忘れたんだね。思い出したら言って下さい。

- ① もう一度考えてみて下さい。

- c エート、分かりません。
 ① もっと考えなさい。遊んではいけないよ。

答え優先
 答え優先
 答え優先

- ① この時間にどんなことが分かりましたか。
 ① 〇〇さんたちは～と考え、△△くんたちは、～と考えたんだな。〇〇さんたちは、□□ということに気づいているな。また△△くんたちは、××を大事に考えたんだね。

- ① みんな分かったのね。この時間は、〇〇の勉強をしたのですよ。

学習の他律化

学習の自律化

自主性の減退

自主性の育成

(4) やる気の出ることばかけ

授業のなかでよりよい人間関係を育てていく、又、よりよい人間関係が育っていると授業が楽しくなり、やる気が出る。このように学級づくりと授業づくりは密接な関係がある。どちらか一方だけやっておけばよいというものではないと思う。この2つの関係を深める要因として、教師の言葉かけをあげることができる。信頼関係を高め、やる気を育てることばかりについて、いくつか例をあげてみたい。

やる気を育てる言葉かけの例	やる気をなくす言葉かけの例
<ul style="list-style-type: none">○そこまでよく頑張ったね○さすが……くんだ○すばらしい考えだね○うん、なかなかいいぞ○わあ、調子いいね○さえているぞ○そこによく気がついたね○うん、たいしたものだ○そうか、それはよかった すばらしいね。次もそうしようね。○Bさんの考えをもとにこんなこと思いついたのか。賢いね、えらいっ	<ul style="list-style-type: none">○何度いわれたらわかるのか○こんなことがわからないのか○何やっているんだ○君のやることはいつもそうだ○へえ、君にその問題がよくできたね○君はもういい、席につきなさい○ほんとにやる気があるのか○またおまえか○だからお前はだめなんだ

3. 授業以外での子どもとのふれ合い

好ましい人間関係を育てるには、教育課程の全領域で行われなければならない。しかし、現実には、授業以外で教師が子どもとふれ合う機会はきわめて少ない。担任である私が、あと少し多く子どもと雑談すれば、すぐわかるであろうこと（たとえば 仲よしの友達のこと、勉強の好き嫌い、登校前のおうちでの出来事、下校後の楽しみ、心配ごと等）、子どもの心の内側を知ることができたかもしれない。子どもの胸の思いを知らないために、子どもに対して無神経な態度をとった場面が何度もあったのではないだろうか。

この反省をふまえて、授業以外の場での子どものかかわりを見直していきたい。たとえば、話をする時には肩を抱いたり、頭をなでたり、ひざの上にのせたりと体にふれながら話すことを心がけ、子ども理解に努めると共に、子どもを受容的に受け入れていくよう改善したい。

授業以外の場面での具体的実践例

生活場面	問題点の見直し	努力、改善したい点
始業前	<ul style="list-style-type: none"> 朝の出会いを大切にしているか。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師から「お早よう」の声かけをし、一人ひとりを温かいまなざしで迎える。
朝の会	<ul style="list-style-type: none"> 形式的な健康観察になっていないか。 前日、当日の欠席者に対する配慮をしているか。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの返事や顔色から、体調や心理状態を把握し、励まし、いたわりの言葉をかける。 一人ひとりの子どもと目を合せながら、「〇〇さん」と温かく呼ぶ。 休んでいた子の登校をみんなに知らせ、いたわりながら遊ぶよう声かけをする。 無届けの場合は、その日のうちで、家庭へ電話連絡する。
休み時間	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの楽しい時間を教師が奪っていないか。 孤立し、疎外されている子はいないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業の開始と終了の時刻を守る。 廊下を通りながらの声かけ、スキンシップに努める。 時には、教師も遊びの中に入り、子どもの本音を開き、遊び仲間の構成をつかんだり、一人ぼっちの子を集団にとけ込ませる工夫をする。
給食時間	<ul style="list-style-type: none"> 子どもと打ち解けた「ふれあいの時間」になっているか。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもと一緒に給食の準備をし、子どもの仕事ぶりを認め励ます。 各グループを回って、どの子ともふれあう。 給食当番への協力、感謝を忘れない。
掃除	<ul style="list-style-type: none"> 共に働き、共通の話題を見つけ、共感する気持ちでかかわっているか。 	<ul style="list-style-type: none"> 「頑張っているね、ご苦労さん」の声かけをする。 教師も汗を流して働く。（やってみせ、やらせてみてほめる）
帰りの会	<ul style="list-style-type: none"> 一日の学校生活の様子を振り返り、「明日も頑張ろう」という意欲をもたせる会になっているか。 	<ul style="list-style-type: none"> 反省点をあげる会からよい面を見つける会へ（お互いのよさを認め合う） 教師からもよい点をほめてあげる（承認）
放課後	<ul style="list-style-type: none"> その日のうちに援助指導すべき子をそのまま帰宅させていないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 気になる子どもの個別指導をする。 日直の子どもとのふれ合いを密にする。

4. 信頼関係を保つ叱り方・励まし方

学校生活においては、子ども一人ひとりのよりよい成長・発達を願って、教師が子どもを叱ったり、励ましたりする機会が多い。その叱り方や励まし方が適切に行われていれば、教師と子どもの信頼関係は保たれ、子どもが変化していくものと思われる。（『小学校学級経営 1990年7月号』小学館）を参考にして、いくつか例をあげてみたい。

<叱り方>

子どもが変化する言葉	変化する前に使っていた言葉	なぜ、変化したか、その理由
<ul style="list-style-type: none"> • 何をやったのかな • それで、あなたは、やったことをどう思う？ • さあ、この後、あなたはどうするかな？（この順で言葉かけをする。） 	<ul style="list-style-type: none"> • 何やってるんだあ！ • どうして～なの！ • 何度言ったらわかるんだ！ • うるさい。あなたが悪い！ • 言うことがきけなかったら、出て行きなさい • 今度やったら、承知しないよ！ • 怒りたくて怒ってるんじゃないの。あなたがしっかりしないから怒っているのよ！ 	<ul style="list-style-type: none"> (ア) 感情的な言葉遣いになっていない。 (イ) 教師側からの一方的な“押しつけ言葉”ではない。 (ウ) まず、やったことの実事の確認をしている。 (エ) 子どもとの「応答型」になっている。 (オ) その子なりの責任のとらせ方を問うている。 (カ) やった事実に対して、いったんは客観的立場に立たせることにより、自分がやったことの“重大性”や「なぜ、叱られているか」に気付かせるようにしている。
<p>留意点 よく言われていることだが、教師が感情的になって怒っても、効果はない。短く、冷静に、普通の声の大ききで叱った方がよい。さらに叱る時は、「なぜ、どうして」と理由ばかりを聞くことは無意味である。いたずらに、時間ばかりが長くなるからである。</p>		

<励まし方>

子どもが変化する言葉	変化する前に使っていた言葉	なぜ、変化したか、その理由
<ul style="list-style-type: none"> • 「Aさんは～をしました」 「えらい！ えらいねえ」 	<ul style="list-style-type: none"> • がんがろうね。 • しっかりやろうね。 	<ul style="list-style-type: none"> (ア) 「～をした」という具体的事実をあげている。 (イ) “精神論”的に励ましているのではなく、努力した結果や事実に対して評価している。 (ウ) 教師が具体的事実を示した上でほめることにより、子どもたちは、どんなことをすればよいかをはっきりわかる。
<p>留意点 励ますことの基本は、ほめることである。ほめつづけることである。しかし、やみくもにほめてもダメである。子ども達が行った具体的事実に対してほめなければ効果はない。やみくもにほめるということは、お世辞に陥りやすいことを心にとめておきたい。</p>		

IV 親との連携

学級づくりにおいて、担任と子ども、子ども相互のよりよい人間関係がいかに大切かということについて述べてきた。しかし、教育効果を高めるためには、子どもとの信頼関係だけではなく、親との信頼関係も必要不可欠なものと思われる。私のこれまでの実践をふり返ってみると、忙しい、忙しいということで、親との相互理解と連携の実践が後まわしになりがちであった。結果的にはこれといった努力もしないのに、子どもの指導がうまくいかないときは、「家庭が悪い、親がどうしようもない」と嘆くことが多かった。

子どもを大切に思う気持ちと実行力さえ持てば、子どもを伸ばすために親とかかわる時間はいくら持てたのではないだろうか。親とのかかわりの必要性とかかわり方について述べ、相互理解と連携を図っていきたい。

1. 教師の指導ぐせ

教師は日常、さまざまな場面で親と接している。子どもに対しての教師が、親に対しても教師であると思いがちである。そして、つい、「もっと厳しく育ててください」、「……を続けるよう説得してください」というような指導的な態度で親に接してしまうことが多い。専門家として、適切なアドバイスができることは、もちろん大事だけれども、親は子どもの成長を助けていく際の協力者であることに留意しなければならないと思う。

担任の思いを伝える前に、親の悩みや不安を受け止め、親の思いを考慮に入れた上で、担任の考えを伝えていく姿勢が必要だと思う。

2. 親を協力者にしていく

子どもが問題を起こした場合、「その原因は家庭にあるのだ」と考え、親に子どものようすを知らせ、警告をすれば、子どもの改善が期待できるはずである。という考え方は、一面では正しいが、この考えをそのまま押しすすめると事態が悪化する例も少なくない。

たとえば、ある子どもが“盗み”をくり返すと、その事態を学級担任は細大洩らさず、熱心に家庭に連絡する。それを受けとる親は、おどろきうろたえ、やむなく、子どもをしかり、おどかし、さとし、ときには哀願してでも、“盗み”をやめさせる努力をする。しかし、この手で完全に治るものではないと言われている。親の悪戦苦闘にもかかわらず、“盗み”をしたという連絡は次々に学校からとどく。こうなると親はどういう状態に追いこまれるのであろうか。

親としての自責、子どもへの怒りや憎しみ、治せないあせりや困惑、世間体への気がね。さらに担任にすまない気持ちよりも不満が募り、わが子をふびんだと感じる、等、さまざまな苦悩にさいなまれる日々を送るにちがいない。

こう考えてくると、子どものことで苦しむ親は、責められ非難を受ける人ではなく、助けを求めている人であることがわかる。この子をどうしたらいいのかを、ともに探し求めてくれる人が必要なのである。そのだれかに学級担任もなり得ないものだろうか。その子がなぜ盗むのか、それは、親にも担任にもたやすくわかるものではないと思う。それなのに、むやみに家庭へ責任だけ押しつけられても親はどうしていいか迷うばかりである。そして、あの手この手で、

子どもにせまる程、問題は難かしくなるばかりだと言われている。

子どものことを担任と親が協力して解決する方向へ進むほかないとすれば、親を協力者にできるか、対立者になってしまうかによって、子どもの問題行動がよい方向に進むか、そうでないかの分かれ道になると思う。

3. 親の心を思いやる

子どものことで本当に悩んでいる親も、その悩みを担任に打ち明けるまでにはかなりの決意があると思う。たいていの母親は、その決心がつくまでの間に、「私の生んだ子だから私の責任だ」、「私のしつけが悪かったのだ」等々、さんざん自分を責めていると思う。親に来校を求める場合も、このような親の心理状態を理解して、親が心を開く雰囲気をつくることから面接を始めたらどうかと思う。

「いやあ、よくおいでくださいました」

「本当によく思い切って、ご相談下さいました。お母さんの熱意を知り、とても嬉しいです」

「お話をお聞きしていますと、ずい分と、いろいろ頑張っておいでですね」

「お母さんの、子どもを思うこの気持ちは、けっして無駄になりません。きっと子どもさんに伝わっていると思います」

担任の目から見れば、たとえ親の行動が空回りであっても、わが子のために一生懸命になっている親の熱意や、親の心を受けとめるようにしていきたい。

V 反省と課題

「学級におけるよりよい人間関係を育てる工夫」について、理論面と実践面の両面から迫っていった。新しい参考文献に出会うたびに、私のかかえているテーマの重さに身がひきしまる思いがした。そして、「私たち教師は、大変な仕事をかかえているのだな」という自覚と責任の重さを感じずにはいられなかった。

教育相談の原点となる児童観

- ① すべての子どもは、他にかけがえのない絶対的な存在である。一人ひとりが違う個性を持った大切な子どもである。
- ② どんな子どもでも、伸びよう伸びようという可能性を秘めた主体的な存在である。

という文章に出合った時は、こんな重大なことを見落としたまま、教壇に立っていたのかと思うと、これまでの教え子や親達に対して詫びたい気持ちでいっぱいになった。せめて1年前にこんなことに気がついていたら、あの時の、あの子への対処のし方が異っていただろうに、と思うと悔やまれてならない。

学びとった児童観を基にして、「人と人との暖かい人間関係をなくして、教育は成り立たない。教師と子ども、子ども相互の信頼関係あってこそ、子どもは学び成長していく」ということを学級経営の基本におき、経営案作成に取りくんできた。しかし、これまで、本格的な経営案を作ったことのない私にとって、大きなプレッシャーとなり、それは、相当な時間と労力を費した。「やっぱり無理だ、止めよう」と幾度となくくじけそうになったが、諸先生方の励ましと御協力のおかげで、まがりなりにも形はできた。もちかえり実践を積むなかで教師としての力量を高め、修正をしていきたい。

子どもを評価しないで、その子のありのままを受け入れる。受容的、共感的に理解するという大問題を抱えて現場に戻るわけだが、学んだ理論が即、実行できるとは思っていない。しかし、カウンセリング・マインドを持ちつづける教師、それを実行しようと努める教師でありたい。そのためには、いつも子どもに対する優しい眼差しや微笑を忘れない教師でありたい。温かくて厳しい教師、優しくてしっかりした教師をめざして日々の実践活動に取りくんでいきたい。

主な参考文献

- | | | |
|------------------|-----------------------|-----------|
| ○尾崎勝・西君子共著 | カウンセリング・マインド | 教育出版 |
| ○永瀬純三 他編 | カウンセリング・マインドを生かす教師 | ぎょうせい |
| ○小泉英二 他編 | 学校教育相談の理論・実践事例集 | 第一法規 |
| ○全国教育研究所連盟編 | 学級担任による教育相談の展開 | 全教連叢書 |
| ○研究紀要(59,3月) | 担任のための教育相談ハンドブック | 福岡市教育センター |
| ○研究報告書第122号 | 子どもの側にたち一人ひとりを伸ばす学級経営 | 愛知県教育センター |
| ○今井五郎 編著 | 学校教育相談の実際 | 学事出版 |
| ○月刊誌 1990年4月～7月号 | 小学校学級経営 | 明治図書 |
| ○月刊誌 1990年6月号 | 総合教育技術 | 小学館 |
| ○北島貞一 編 | 児童の心に迫る学級教育相談 | 明治図書 |
| ○神保信一 他編 | 小学校教育実践構座Ⅰ 児童の理解・指導 | ぎょうせい |
| ○手塚郁恵 刀根良典共著 | 学級経営実践マニュアル | 小学館 |
| ○辰野千寿 | 学習指導用語辞典 | 教育出版社 |